

小さくとも世界に誇れるまち 「福」あふれるまちを目指して

市民力と民間活力が支える 市制施行70周年

大阪府池田市は今年、市制施行70周年の大きな節目を迎えた。記念事業は昨春に始まり、今年4月の記念式典を挟んで12月に至るまで、計70以上の事業が市内各所で実施されている。

市制施行70周年記念イヤーのキャッチフレーズは「福あふれるまち池田 70th」だ。福とはもちろん、幸福の福である。

「池田市には幾つもの福があります」と語るのは倉田薫池田市長である。

「例えば世界的な人気食品であるインスタントラーメンの発祥地は池田市です。発明者は池田市民で、日清食品の創業者でもある安藤百福さんでした。百福さんは生前の平成14年、ベンチャー企業支援の基金として当市に1000万円もの寄付をしてくださりました。当市ではそれを基に『池田市事始め奨励

基金条例』を制定し、以後、市内の優れたベンチャー企業創業者に『事始め奨励大賞(百福大賞)』を毎年贈り、当市に千福・万福をもたらしてくれる第2、第3の百福さんの登場を奨励しています。

また『池田の牛ほめ』『池田の猪買い』など池田市を舞台にした上方古典落語が幾つもあることにちなみ、当市が展開する『落語のまち池田』発信事業の基本精神は『笑うまちには福来る』です。

池田市の「福」はさらにある、と続ける。

「昨春から始まった池田市制施行70周年記念事業の皮切りはビリケン像の設置でした。ビリケン像は大阪・通天閣のもの(複製)が有名ですが、オリジナル像は池田出身の初代・田村駒治郎氏が創業した繊維商社・田村駒(株)本社に祭られ、商標登録権も明治末期以来、田村駒(株)が所有しています。初代・田村氏は公会堂を寄付するなど、当市の発展に寄与された恩人です。そんなご縁から田村駒(株)

の承認を頂き、アメリカ生まれの福の神・ビリケン像を『福あふれるまち池田』のシンボルとして設置させていただきました」

池田市制施行70周年のイメージキャラクター「ふくまるくん、ふくまるちゃん」のキャッチフレーズには市制施行70周年記念式典当日4つ子の赤ちゃんが誕生した。これは第4子が誕生すると祝い金のほか、希望者に軽自動車を3年間無償貸与する池田市の子育て支援制度にちなんでいる。池田市はほかにも多彩な子育て支援を実施しており、「ふくまる」は子宝に恵まれた子福者の象徴として「子育てのしやすいまち池田」のPR役も果たしている。

また福の神・ビリケン像の設置を皮切りに始まった池田市制施行70周年記念事業の経費

はすべて、市内企業および市民からの寄付(浄財)で賄われている。

全国区的な話題を集めた「社会人落語初代日本一決定戦」、市民・行政職員・学者・芸術芸能家・文化団体などが「文化の視点」から「住んで誇りに思えるまち」を巡る政策について討議した「第11回全国文化の見えるまちづくりフォーラム」など、硬軟取り混ぜた池田市民主催の記念イベントに堂々と肩を並べているのも、地域住民が主催する数多くのイベントや事業だ。

まさに市民・事業者・行政が「わがまち」のために力を結集して実現した、池田市の「福あふれる70周年」といえるだろう。

厳しい行財政改革の中でも 忘れない笑いや希望

祝福ムードあふれる池田市だが、実はわずか14年前の平成7年度決算で、赤字団体に転落という非常につらい体験をしている。長年にわたるハード面での過剰投資のツケが、バブル経済の崩壊で一気に噴出した結果ともされる。この「負の遺産」をあえて引き継ぐ形で平成7年にスタートしたが、現在4期目に至る倉田市政だった。

「このままでは3年後に財政再建団体(当時)への転落が必至といわれる中、市長就任直後から準備を始め、翌年度には97項目に上る課題対応を目指す『池田市政財政みなおし推進計画』を策定。『みなおし元年』をキャッチフ



上方落語「はてなの茶碗」を持ちネタとするコーヒー店の店頭では、ネタにちなんだ「はてなの茶碗ドリッパー」を売り出し中



日本一小さな市立動物園「五月山動物園」(入園無料)には姉妹都市・ローンセストン市(豪)から贈られたウォンバットが人気を集めている

倉田 薫
池田市長



「第11回全国文化の見えるまちづくりフォーラム」には市民がたくさん詰め掛けた

(大阪府)



近世までは物流の大動脈だった猪名川(橋は阪神高速道路)

そして阪急池田駅周辺の店舗が、池田ブランド構築事業推進や地域活性化事業推進を目的に設立された第3セクター「いけだサンシー(株)」を通じて上方古典落語の演目を持ちネタにもらい、それにちなんだ店舗展開を行っている(参加店舗は52店舗(平成21年10月1日現在))。

例えば江戸落語でも知られる『時そば』の原話は上方落語の『時うどん』とされるが、サカエマチII番街のうどん屋さんがこの演目を持ちネタにして「刻うどん」という商品を出している。同様に『池田の牛ほめ』を持ちネタとするラーメン屋さんは、牛筋肉入りの「牛ほめラーメン」を目玉にしている。

また同商店街には「いけだサンシー(株)」がプロデュースする池田の案内所兼チャレンジ

「インスタントラーメンの歴史などが分かる「インスタントラーメン発明記念館」、前出「落語みゆーじあむ」、宝塚歌劇の創始者小林一三氏の寄贈書を中心に日本有数の演劇図書館として知られる「阪急学園池田文庫」、小林一三氏が個人収集した書画骨董・美術品を蔵する「逸翁美術館」、工場が戦前からあり、本社も池田市にあるダイハツ工業運



アメリカの福の神ピリケン足裏をなでると幸運が訪れると人気

ショップ「引札屋」があり、将来の正式な起業を目指す店舗が入居し、工夫を凝らした商品の陳列販売をしている。

「にぎわい創出には商工業の振興と観光振興が不可欠です。特に商店街などの振興とともに重要と考えるのは百福大賞も含めた創業者(起業者)支援です。例えば知的財産権についての無料相談実施や、インキュベーション・マネジャーとの連携を密接にした企業育成室(インキュベーション・センター)『いけだピアまるセンター』の運営や入居奨励などの事業には、今後さらに力を入れていくつもりです。また本市ならではの観光振興策として、池田の多彩な魅力をコンパクトにご紹介するべく、市内に点在するミュージアムを巡る『ミュージアムツーリズム』を推奨しています(倉田市長)

池田市にはユニークなミュージアムが多い。インスタントラーメンを発明した安藤百福氏の事績やインスタントラーメンの歴史などが分かる「インスタントラーメン発明記念館」、前出「落語みゆーじあむ」、宝塚歌劇の創始者小林一三氏の寄贈書を中心に日本有数の演劇図書館として知られる「阪急学園池田文庫」、小林一三氏が個人収集した書画骨董・美術品を蔵する「逸翁美術館」、工場が戦前からあり、本社も池田市にあるダイハツ工業運

「中世の池田は城下町でしたが、近世以降は街道の発展とともに都市と農村の性格を併せ持つ『在郷町』として栄えました。市域西部を流れる猪名川や川沿いの街道は、衣食住にまつわる物資の流通ルートとしてにぎわい、水が豊富で清らかな池田には元禄時代に38軒もの造り酒屋があったほどです(倉田市長)

また明治43年には大阪中心部から北に約20kmという好立地を生かし、阪急電鉄による「日本最初の分譲住宅地」(室町地区)が池田に誕生した。住宅ローンシステムの採用第1号、



市制施行70周年のイメージキャラクター「ふくまる」家族は子育てしやすいまち池田市の象徴でもある



電線地中化のほんまち通りに面した「落語みゆーじあむ」(入場無料)

阪急池田駅前から「落語みゆーじあむ」に至る道筋のサカエマチ商店街は、その精神を体現する象徴的な場だ。同界隈は「落語のまち池田」の発信地である。以前は全国の中心市街地と同様、低迷の傾向にあったが、平成19年に始まった「落語のまち池田」発信事業を契

「落語のまち池田」発信事業は、平成19年、ほんまち通りの電線地中化などの整備工事に伴い、池田銀行発祥地にあった古い家屋がリニューアルされ文化交流施設「落語みゆーじあむ」(池田市立上方落語資料展示館)となったのを契機に始まった。同施設には上方落語の豊富で貴重な資料が保存展示されているほか、アマチュア落語家入門講座など多彩な事業にも活用されている。

する「池田市政財政システム改革プラン」(以後、改革プラン)を策定。アウトソーシング推進や協働の仕組みづくりなどによる行政のスリム化、より一層の人員費削減、余剰施設廃止、受益者負担見直しなどの取り組みを中心に、改革プランを着々と実施してきた。

「しかし、昨年9月に財政推計の見直しを行ったところ、平成21年度までの収支は改善するものの平成22年度には再び赤字に転落する可能性が分かりました。さらに直後から始まった世界同時不況の影響もあり、今後の市税収入に深刻な影響が出ることは確実です。

そこで今年3月には職員数のさらなる削減と給与削減による人件費総額の抑制、市単独事業を中心とする事務事業のゼロベースでの見直し、寄付などによる歳入確保、投資的事業の抑制などを骨子とする『池田市政財政システム改革プラン 中間見直し』を策定しました(倉田市長)

そう語る一方で、倉田市長は「そのように厳しい財政状況の渦中にあるからこそ忘れてならないのが『笑い』や『元気』、未来への明るい『希望』を常に描こうとする前向きな精神です」と指摘する。



オリジナルカップ麺づくりなどの体験もできる「インスタントラーメン発明記念館」は小学生から外国人まで連日にぎわう

池田の奥深さを知る ミュージアムツーリズム

驚かされるのはそれらミュージアムの展示内容のほとんどが、池田発の歴史や各種業績、池田にかかわりある篤志家、企業などが自力で収集した成果ということだ。それだけの蓄積が池田にはある。



細河地区は植木の日本4大産地の一つだが、水田の土壤に植木と米を交互に栽培するのが大きな特徴

「地域分権は11小学校区ごとに地域内の課題抽出と解決を検討する地域コミュニティ推進協議会を設立し、その実現に向けた事業に對する予算提案をしていただく」という制度です。『自分たちのまちは自分たちでつくる』を合言葉に既に3年目を迎えました。各区域で活発な事業が実施されています(倉田市長)

地区推進協議会の試みは全国的に行われているが、分野が限定されているとはいえず、池田市は各地区に「予算提案権」を持たせている。これは全国初の試みだろう。しかも予算額は総額約7000万円(1地区当たり700万円程度を人口に応じて配分)に上る。内容もソフト事業が急増しつつあるところ。に、同事業が軌道に乗り始めていることがうかがわれる。

その原動力の一端は職員ボランティアによる地域サポーター制度にある。地域サポーターは各地区に数名ずつ配備され、住民に法制度面や手続きなどのアドバイスを行う。職員研修の場としても役立つし、市民からも市役所との距離を縮める制度と好評を得ている。

「相変わらず厳しい環境下ですが、長年の行政改革で職員や市民の意識改革は確実に進んでいます。これから必要なのは先人の知恵を生かしつつ、市民が自らの手で新しい歴史を築き上げようとする気概です。行政・職員はそれをサポートする。それが分権型社会の最終目標。地域分権のあるべき姿と考えております(倉田市長)

総面積22㎢の池田市域は、約半分が市民の憩いの場・五月山とそれに続く丘陵地帯だ。



健康増進と保健・福祉サービスの窓口と交流拠点機能を集約した保健福祉総合センター(今年4月完成)には最新の設備がぎっしり。写真は集団補聴システムが設置された大会議室



誰でも自由に借りられる無人・無料・無施錠の「まち角の図書館」は全国初の試み(市内13カ所)

この非常にコンパクトで変化に富んだ地勢さながら、「小さくとも世界に誇れるまち」をキャッチフレーズに、厳しい行政改革を断行しながら進められる池田市の各種まちづくり事業および地域活性化事業は、そのどれもが、明るさと元氣と創意工夫に満ちている。

(取材・文 遠藤 隆)

物資が集散し、人が大勢移動する川沿いや街道沿いには自然発生的に富と文化が蓄積す

豊かな土壌に育つ 教育・池田学・地域分権

生活協同組合方式の食料品・日用品購買システムなど、さまざまな形でその後の分譲住宅開発に影響を与える先駆的な事業だった。

池田にはそうした歴史的・文化的先進性のエッセンスが随所に点在している。地域の多様な魅力や歴史文化を体系的に知り、触れ、体験できる施設群を訪ねる「ミュージアムツーリズム」が観光メニューとして無理なく成立するのも、十分にうなずけるのである。



地域が事業を企画し、予算まで提案できる地域分権制度は池田市発にして全国初(協議会風景)

る。池田にも同様に芸能や学問、文化を大事にする素地が歴史的に醸成されてきた。池田市は旧池田師範・旧大阪学芸大学・大阪教育大学が古くから立地していたことなどから「教育のまち」とも呼ばれるが、教育を大事にする素地は古来、風土として用意されていた。

平成16~20年度まで実施された「教育のまち池田」特区はまさに、そんな風土を持つ池田にふさわしい事業だ。

「教育のまち池田」特区では教育課程を弾力化し、新たな教科を設定できる「構造改革特別区域研究開発学校設置事業」と、少人数学級編成を行うため市単位で教員を採用できる「市町村費負担教職員任用事業」が認定された。これにより実施されたのが、ネイティブの英語講師を配置した小学校英語活動(平成16年度)。全学年を対象に週1時間の英語活動を実施)や中学校選択英語(平成17年度)。必修以外に週1時間の英語活動を実施)、さらに科学の学習と情報の学習をリンクさせた小学校の「科学・情報の時間(平成16年度)」だ。

特区事業はいずれも少数の推進校で実施した後、市内全校に拡大し、それらは特区終了後の現在も発展的な形で実施されている。

また池田の歴史や環境を幅広く学ぶ生涯学習「池田学」講座の実施も、多彩な文化や歴史を持つ池田市らしい事業といえるだろう。

「『教育のまち池田』特区では主に英語を媒介に子どもたちのコミュニケーション能力の醸成や、科学的思考力・情報活用能力の育成を

図る契機となりました。また『池田学』とは、歴史・文化・自然・産業など、池田にかかわるあらゆる領域を包括した地域学です。市民の皆さんには身近な池田のすべてを学ぶことで「知る楽しみ」「学ぶ喜び」を感じていただければと考えています(倉田市長)

特区事業の効果は数多い。中でも目立つのは、子どもたちが落ち着いて人の話を聞くようになり、自分の意見を自分の言葉で組み立てようと努力する「姿勢の変化」が現れたことだ。という。市民の知る楽しみ、学ぶ喜びを醸成しようとする「池田学」にも、池田を「自分たちのまち」としてより深く認識してもらい効果が期待される。



「教育のまち池田」特区の小学校の授業風景(科学・情報の時間)